

石川県立美術館だより

第480号 令和5年10月1日発行

BIJUTSUKAN
DAYORI

皇居三の丸尚蔵館収蔵品展

皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―

国宝《動植綵絵 群鶏図》伊藤若冲 皇居三の丸尚蔵館収蔵
11月5日まで展示
―「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川
―麗しき美の煌めき―」より―

- 特別陳列 前田家の至宝Ⅰ【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 茶道美術名品展Ⅰ【古美術】
- 模様を楽しむ【近現代工芸】
- モダン 近代逍遙【近現代絵画・彫刻】
- Rey Camoy – 鴨居玲 晩年の肖像 –【近現代絵画】
- 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 令和5年度土曜講座後期分のお知らせ
- 10月の行事予定

- 学芸室の人々
- アラカルト ただいま展示中

皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川ー麗しき美の煌めきー

10月14日(土)～11月26日(日) 休館日:11月6日(月)

観覧料：一般1,500円(1,200円)、
大学生1,000円(800円)
*2館共通券 * ()内は20名以上の団体料金・割引料金
*いずれも消費税税込
*無料対象：高校生以下、18歳未満、障害者手帳をお持ちの方と付添者(1名)
*65歳以上の方は団体料金・割引料金
*いしかわ文化の日(10/15)、文化の日(11/3)は団体料金・割引料金
*オンラインによる事前販売もあり
*友の会の方で「石川県立美術館主催企画展入場券」をご利用の方は最初に美術館にお越しください。

皇室ゆかりの美術工芸品などを収蔵・展示する皇居三の丸尚蔵館の収蔵品による展覧会を開催します。本展は、石川県で行われる国民文化祭のメイン行事として開催するもので、三の丸尚蔵館の収蔵品の中から石川ゆかりの作品と、名宝の数々をご覧いただきます。本展は石川県立美術館と国立工芸館による初の共同開催で、一章から三章を石川県立美術館で、四章、五章を国立工芸館で展示します。

第一章 皇室と加賀前田家

三代藩主前田利常と後水尾天皇、八条宮家の関係を中心に本章は展開します。武家文化では実現できなかった高度に雅な文化をご覧いただきます。

第二章 皇室の至宝

皇居三の丸尚蔵館の約一万点にのぼる収蔵作品には、各時代の一級の文物が伝わっています。本展では、近年国宝指定された八件のうち四件が展示されることも話題です。(前後期で展示替え有り。2件は第一章にて展示)

第三章 皇室に伝わった石川美術

本章では皇室に伝わった石川県ゆかりの美術工芸品の中から、加賀藩ゆかりの絵師・岸駒をはじめ、明治期に美術教育に貢献した画家の作品を中心に展示します。

第四章 皇室に伝わった石川の工芸

(一)明治・大正編 明治・大正期の石川ゆかりの品を中心に、石川工芸の源流である藩政期の工芸の粋も紹介します。
(二)昭和・平成編 皇室に継承された昭和・平成の石川県ゆかりの優れた作品群をご紹介します。

第五章 皇室を彩る華麗なる工芸

石川出身の東京美術学校(現・東京藝術大学)教授の島田佳矢がデザイン、監修した《桑木地飾棚》、《鳳凰菊文様蒔絵飾棚》、《鶴桐文様飾棚》と、それらに附属する華麗なる御飾品の数々を展示します。

■関連イベント

◇特別講演会

第1回「皇室と加賀藩前田家の縁^{えん}」

— 皇居三の丸尚蔵館の収蔵品から — (仮)
10月22日(日) 13時30分～15時

講師：太田彩氏(元宮内庁三の丸尚蔵館首席研究官)

第2回「三の丸尚蔵館の過去・現在・未来」(仮)

11月23日(木・祝) 13時30分～15時

講師：朝賀浩氏(皇居三の丸尚蔵館学芸部)

いずれも石川県立美術館ホールにて

◇ワークショップ「みんなでつくろう！扇面散屏風」

11月18日(土) 14時～15時30分

11月19日(日) 10時30分～12時

石川県立美術館で通期展示される《扇面散屏風》(依屋宗達筆)を参考に、扇形の画用紙に絵を描いて、参加者全員でひとつの扇面散屏風を作ります。

定員：10組程度(先着順)

会場：石川県立美術館

申込方法：兼六園周辺文化の森公式ウェブサイトから

前田育徳会尊經閣文庫分館

特別陳列 前田家の至宝Ⅰ

9月16日(土)～10月22日(日) 会期中無休

企画展(第7・8・9展示室)

第38回国民文化祭 第23回全国障害者芸術・文化祭
いしかわ百万石文化祭2023

会場 石川県立美術館 国立工芸館

主催 石川県立美術館、国立工芸館、いしかわ百万石文化祭2023実行委員会、
宮内庁、文化庁、独立行政法人国立文化財機構

共催 北國新聞社

特別協力 紡ぐプロジェクト、読売新聞社、公益財団法人前田育徳会

学芸員の眼

本文でも紹介しましたが、近年皇居三の丸尚蔵館の収蔵品から8件が相次いで国宝に指定され、本展ではそのうち前後期合わせて4件が展示されます。中でも人気は江戸時代の絵師・伊藤若冲の《動植綵絵》(本展では4幅展示。展示替えあり)ですが、鎌倉時代のやまと絵の最高峰と言われる高階隆兼の《春日権現験記絵》も見逃せません。七〇〇年以上の年月を感じさせない絵の具の鮮やかさには目を見張るものがあり、入念で繊細に描き込まれた画面は、当時の信仰や生活が細やかに表現され、舌を卷きます。七〇〇年の時を超え、望遠鏡で当時を覗き込んだかのような気持ちにさせてくれる逸品です。混雑状況が心配ですが、空いていれば単眼鏡などでじっくり鑑賞したい作品です。

今回の展示では、前田家を代表する茶道美術の名品を展示しています。重文《茄子茶入 銘富士》もそのひとつです。本作は、中国・南宋時代13世紀に作られて日本に渡来したもので、利休以前に選定された名物茶器で最も由緒があり、貴重なものとして分類された大名物となっています。また、諸説ある「天下三茄子」には必ず数えられています。

茶入は、一般に濃茶用の抹茶を入れておく陶器製の容器のことで、通常は象牙の蓋とともに展示されます。特に唐物が重視され、その中でも細かくて滑らかな土で薄作りした上に褐色釉をかけた、手持ちの軽い漢作が珍重されました。形状によって茄子や肩衝などに分類されており、特に茄子には様々な想いがこめられてきたようです。

本作は、茄子の基本形ともいえるべき形姿で、全体に

艶やかな鉛色の鉄釉が深く掛かり、その上にやや青みがかった白濁釉を大きく流して見事な釉景色を作り出しています。姿、釉色ともに格調が高く、胴径7.1cm、高さ6.0cmのサイズながら堂々たる風格を持つっており、それが富士山の偉容を想起させるとともに、唯一無二の茄子茶入ということから「富士」の銘が付けられたといわれています。

もと室町13代将軍足利義輝が所持し、医学者の曲直瀬道三が拝領した後、祐乗坊、織田信長へと伝わり、信長没後再び道三のもとに帰り、天正15年(1587)に豊臣秀吉が催した北野大茶会に出陳されました。その後道三の孫から秀吉に献じられ、慶長2年(1597)、秀吉から前田利家に贈られ、その後「秘蔵中の秘蔵」として代々前田家に伝えられました。



重文《茄子茶入 銘富士》前田育徳会蔵

国宝《春日権現験記絵》巻八(部分) 高階隆兼 皇居三の丸尚蔵館収蔵
通期展示(半期場面替)

茶道美術名品展 I

9月16日(土)～10月22日(日) 会期中無休

学芸員の眼

今回着目した重文《色絵梅花図平水指》は、山川庄太郎氏が国宝《色絵雉香炉》を石川県に寄贈されたことを受けて、石黒伝六氏から寄贈されました。代々薬種業を営んでこられた石黒氏も、典型的な金沢の旦那衆で著名な茶人でした。高橋義雄『東都茶道記』の「金沢せんびろく闡秘録」により、昭和戦前期までの金沢の茶の湯の動向を知ることができます。金沢における茶の湯の興隆が、加賀藩主・前田家の文化政策を基盤としたものであることは言うまでもありませんが、明治維新後、新たに文化の担い手となった旦那衆の存在なくしては、今日の隆盛はありませんでした。そして石川県立美術館のコレクションも、旦那衆文化と、その文化的求心力に多くを負っています。



重文《色絵梅花図平水指》野々村仁清作

今回は、改めて重文《色絵梅花図平水指》野々村仁清作に着目します。本作は、国宝《色絵雉香炉》、重文《色絵雌雉香炉》とともに当館を代表する所蔵品のひとつです。円筒形の器面に、咲き誇る梅の枝を見事に展開し、笹を添えています。意匠の構成から「松竹梅」を連想しますが、松は描かれていません。さらに、同工の重文《色絵月梅図茶壺》(東京国立博物館蔵)のように、月も描かれていません。仁清があえて松や月を描かなかった深意は、「不完全性の美学」にあると考えられます。

兼好は『徒然草』の82段で、すべてを完全に整えてしまうのは悪いことだ。し残したままにしておくことが面白く、長く続くという趣旨のことを述べています。こうした考えは、茶の湯における侘びの思想に大なる影響を与えました。侘びといえ、枯れた風情や歪められた形を連想するとおり、茶道美術の好みも、こうした美意識が主流となりました。

しかし、枯れた風情は、今回展示される県文《黒樂茶碗 銘北野》のように、利休が好んだ初代長次郎作の黒樂茶碗が頂点のような感じがしますし、織部焼の意匠や形姿も、時に行き過ぎの感があります。そこで仁清は、このような状況の中に独自の活路を見出しました。重文《色絵梅花図平水指》は、色絵という新たな技法を駆使して、赤や薄緑などを鮮やかに発色させつつ、金銀を効果的に使用して、意匠を端正な円筒形に見事に展開しています。そして、意匠構成のなかに侘びを含意する手法は、やまと絵の伝統に立脚したものと考えることができます。



県文《黒樂茶碗 銘北野》初代長次郎作

近現代絵画・彫刻(第3展示室)

モダン 近代逍遙

9月16日(土)～10月22日(日)

11月9日(木)～11月26日(日)

前号では、近代における〈美術〉のあり方について説明しましたが、今回は「あたらしい近代生活」セクションについて紹介したいと思います。

明治時代以降、人々は生活様式の大きな変化を経験し、服装、行動、物事の考え方に至るまで幾度もの更新を重ねました。特に洋式の文化との出会いは、賞賛、反発、折衷のいずれによっても様々な文化を生み出していきました。あたらしい近代生活(モダン・ライフ)に作家たちは敏感に反応し、関心をもって作品に残していきました。

作品としてよくあるのは、女性像です。流行の最先端を走る女性はいしばしば作品のモチーフとなり、当時のトレンドを想像できる手段ともなっています。洋

な組み合わせ?どんな色?さまざまな視点から、自分で好きに模様の名前を考えてみるというワークシートです。すぐにこれがいい!と浮かぶものから、なかなかしっくりくるものが無いものであるかと思いますが、楽しんで取り組んで作品鑑賞のきっかけにしてください。また、わくわくわーくしーと楽しんでいただくと時間は許す限り展示室を見てまわり、これ好きだな、綺麗だな、と思える作品と出会ってください。

会期中「0才からのファミリー鑑賞会」も予定しておりますので、この機会に美術館デビューをとお考えのお子様とのんびり美術鑑賞を楽しみに来てみませんか。

装ではすっかり決めた女性や、明治後期からの新しい身分である女学生は多くの作品の題材となっています。

展示中の作品を1点見てみましょう。舞い散る落ち葉を背景にモダンな装いの女性が描かれる山川秀峰《秋》です。昭和2年(1927)に制作されました。髪型は、ヘッドホンをつけたシルエットを模すラジオ巻き。羽織の柄にあるトランプも合わせて当時の流行です。戦前においては現在の着付けより半襟を大きく出していました。黒いものは珍しいです。口紅とシヨールの赤も鮮やかで、昭和初期におけるお洒落を垣間見ることが出来ます。現代のわたしたちが見てもお洒落かもしれませんね。



山川秀峰《秋》

近現代工芸(第5展示室)

模様を楽しむ

9月16日(土)～10月22日(日) 会期中無休

今回コレクション第5展示室では「模様を楽しむ」というテーマでの特集をお届けしています。この特集展示では作品を楽しむきっかけとして「わくわくわーくしーと」を用意しました。以前はこども専用となっていたワークシートですが、コレクション恒例の夏休み親子で楽しむ美術館という冠から、みんなで楽しむという冠に変わったのもあり、ワークシートもこども中心だけに限らず、来館された方皆さんを対象に用意しております。今回の「模様を楽しむ」展示室で用意したワークシートは「模様に名前をつけよう!」というお題としてみました。模様にある元々の名前がとも気になるのはさておき、出題の模様をみつけたら、どんなかたち?どんな絵?どんな

組み合わせ?どんな色?さまざまな視点から、自分で好きに模様の名前を考えてみるというワークシートです。すぐにこれがいい!と浮かぶものから、なかなかしっくりくるものが無いものであるかと思いますが、楽しんで取り組んで作品鑑賞のきっかけにしてください。また、わくわくわーくしーと楽しんでいただくと時間は許す限り展示室を見てまわり、これ好きだな、綺麗だな、と思える作品と出会ってください。

会期中「0才からのファミリー鑑賞会」も予定しておりますので、この機会に美術館デビューをとお考えのお子様とのんびり美術鑑賞を楽しみに来てみませんか。



米沢弘安《金象嵌六角壺》

近現代絵画・彫刻(第6展示室)

優品選

9月16日(土)～10月22日(日) 会期中無休

暑かった夏から、いよいよ国民文化祭開催の秋へと移ってきています。日本画分野から「三の丸尚蔵館展」の出品作《御養蚕画帖》の作者、久保田米僊の《馬山斥候図》を紹介します。戦国武将の吉川元春は、羽柴秀吉六万の兵を前に、橋を壊し、舟を上げるなど、自ら退路を断ちます。元春の文字通り「背水の陣」の覚悟を前に秀吉は戦わずして引き揚げたといいます。米僊の緊張感ある歴史画をお楽しみください。

油彩画分野では鴨居玲の師である宮本三郎の《熱叢夢》を展示します。生前、宮本三郎と自分の作品が展示された当館を訪れた鴨居は「先生の作品の横に並べられる、なんと恐れ多い」と話していたといいます。内向して思索の世界へ向かう鴨居の作品と対照的な、まばゆい輝きを放ち華麗な裸婦像の宮本の



宮本三郎《熱叢夢》

近現代絵画(第4展示室)

Rey Camoy

—鴨居玲 晩年の肖像—

9月16日(土)～10月22日(日) 会期中無休

当館では、毎年鴨居玲の命日にあわせて特集展示を行っています。本年は「Rey Camoy —鴨居玲 晩年の肖像—」と題し、昭和52年(1977)鴨居が帰国した以降の作品を中心に紹介します。

帰国後の鴨居は新しいテーマを見出すべく苦悩していました。その中で取り組みはじめた「裸婦」というテーマは、鴨居を「もう少し生きてもよい気がする」という気持ちにさせたといいます。また鴨居と深い交流のあった日動画廊社長・長谷川徳七へ宛てた手紙には新たなテーマを見つけた喜びが伝えられています。裸婦を通して性愛や情欲について考え描くことが鴨居の挑戦となり、生きる希望のひとつとなりました。

今回展示する《ETUDE(A)》(1978年)もその

ひとつでしょう。女性の肉体の重量感が見事に表現され、鴨居の巧みな描写力が示されています。自身の満足のいく作品を描くべく、「裸婦」という画題との格闘は亡くなるまで続きました。

また今回は、作品だけでなく鴨居玲のプライベートの姿にも焦点を当てます。鴨居は刀を所持し、アトリエで手入れをすることを習慣にしていたといいます。一方で、帰国してから数年後には銃の収集も始めました。飲み友達にコレクションを紹介し、新しい友人たちには銃を振り回すおちゃめな姿を見せたといえます。伝えられた資料やコレクションから、作品だけでは味わえない鴨居の魅力も合わせてお楽しみください。



鴨居玲《ETUDE (A)》

令和5年度土曜講座 後期分のお知らせ

5月より開講しております土曜講座ですが、10月以降の予定をお知らせいたします。
当館学芸員が日ごろ研究しているテーマや、開催中の展覧会に関連したテーマで行う講座となっております。

お気軽にご参加ください。毎回午後1時30分より3時まで。事前申し込み不要、聴講無料です。

※都合により内容を変更、または中止する場合がございます。最新情報は当館公式ウェブサイトにてご確認ください。

月／日	テーマ	担当
10月21日	後水尾天皇と前田利常	村瀬博春
11月25日	所蔵作家シリーズ1 北野恒富	前多武志
12月9日	初代徳田八十吉の陶芸	奈良竜一
1月13日	前田綱紀の修復思想	村瀬博春
1月20日	石川県立美術館所蔵品修復について	寺川和子
1月27日	彫刻家・田中太郎 ー誠をつくす彫刻ー	竹内 唯
2月3日	前田家伝来の名物裂 ー近年の調査結果からー	村上尚子
2月10日	近現代書の風景 ー「よむ」から「みる」へー	深山千尋
2月24日	所蔵作家シリーズ2 鈴木華邨	前多武志

学芸室の人々

こどもたちと何かをつくりだすことが楽しくてしょうがありません！美術館勤務となる以前は中学校美術教員でしたので、学校ではひとつの題材に、あーでもないこーでもないと思いをめぐらし、かたにしていくなかで、頭の引き出しを一杯開いて探し出し、目を輝かせているのを、そして、出来上がった作品を前に満足そうに微笑み、言葉を記し、発言するのを支援する最高の時間が大好きでした。新たな発見や素敵な思いをいっぱい浴びていた日々でした。学校出前講座で対話型鑑賞を行っていたときのこどもたちとの会話もそうです。素敵な言葉との出会いにこれからもたくさん刺激を受けていきたいと思っています。



西 ゆう子（普及課担当課長）

10月の行事予定

10月の行事予定	
10月（日）	11月（日）
10月1日（日）	11月1日（日）
対象：0才～小学生までのお子さんとそのご家族 ※申込受付は終了いたしました。	対象：0才～小学生までのお子さんとそのご家族 ※申込受付は終了いたしました。
10月21日（土）	11月21日（土）
「後水尾天皇と前田利常」 修復工房担当課長 村瀬 博春	「後水尾天皇と前田利常」 修復工房担当課長 村瀬 博春
10月28日（土）	11月28日（土）
「0才からのファミリー鑑賞会」 コレクション展示室 無料 要申込	「0才からのファミリー鑑賞会」 コレクション展示室 無料 要申込
10月29日（日）	11月29日（日）
「13時～15時 美術館講義室 無料」	「13時～15時 美術館講義室 無料」

《海の伝説》うみのでんせつ

縦226.0cm 横180.0cm

昭和48年(1973) 再興第58回院展

梅川三省 うめかわさんせい

大正元年～昭和61年(1912～1986)



作者の梅川三省が、神話や伝説を主題とし始めたころの作品です。神話や伝説をベースにすることで画面に心理的な奥行きが得られ、見るものに考えさせる作風が生まれました。

本作に目を向けると、上下に向きを変える二体の裸の女性と、かもめが一羽、画面いっぱいに描かれています。作者の言葉によると「愛する人を 海で失い嘆き悲しんだ乙女は 海へ身を投げ かもめとなって いつまでも海の上を飛んでいた」という伝説を下敷きにしたようです。この言葉をもとに見直すと、海に飛び込み沈んだ女性性が、やがて浮上し、かもめへと姿を変えて飛びたつ様子と見ることが出来ます。一つの画面に同じ人物を描くことで時間の流れを表す「異時同図法」が取り入れられているのです。この方法は古くは国宝《玉虫厨子》に描かれる「捨身飼虎図」や国宝《信貴山縁起》に見られます。

梅川三省は、大正元年小松市に生まれ、はじめ山川秀峰、次いで伊東深水に師事。昭和三十一年院展に初入選すると郷倉千鶴に師事し、以後院展を舞台に活躍しました。晩年は肺がんに侵されながらも最期まで制作を続けました。

次回の展覧会

令和5年10月27日(金)
～11月26日(日)
会期中無休

前田育徳会
尊経閣文庫分館

特別陳列
前田家の至宝Ⅱ

第2展示室

茶道美術名品展Ⅱ

第5展示室

特別陳列
初代徳田八十吉とその時代Ⅰ
【工芸】
11月9日～11月26日

第3・4展示室

モダン
近代逍遙
【近現代絵画・彫刻】
11月9日～11月26日

第6展示室

優品選
【近現代絵画・彫刻】
11月9日～11月26日

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

10月2日は第1月曜日より

コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

10月は無休で開館しています

「石川県立美術館だより」に広告を掲載してPRしませんか？

広報紙広告ならではの
メリット

地域に根ざした
情報発信

石川県での
知名度向上

自治体発行の
信頼度の高い
広報媒体

他エリア自治体広告もお任せください！

092-716-1401

株式会社

ジチタイアド

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG 薬院ビル7F 財源確保

※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイアド」に分社化しております。

石川県立美術館だより
第480号(毎月発行)
2023年10月1日発行

〒920-0963

金沢市出羽町2番1号

Tel:076(231)7580

Fax:076(224)9550

URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。